

カナダにおける公的記憶と歴史家

— 新カナダ戦争博物館展示をめぐる論争を手がかりに —

細川 道久

Public Memory and Historians in Canada: “The Enduring Controversy” over an exhibit at the new Canadian War Museum

Michihisa HOSOKAWA

Abstract

This article argues out several problems in negotiating contested memories over war to construct public memory in multicultural Canada. Firstly, it follows the controversy especially between veterans and historians over the exhibit at the new Canadian War Museum on the Allied air-raids in Germany during the Second World War. Secondly, it describes the efforts to popularize Canadian history in education by historians. Lastly, the argument moves on to military historiography in Canada and the peculiarity in which Canada's wars have been thought to be relevant to Canadian nationalism, which, with a growing number of immigrants, makes it difficult to accommodate polyphonic voices to construct public memory.

キーワード：戦争, (公的) 記憶, カナダ史, 多文化主義, カナダ戦争博物館

目次

1. はじめに
2. 新カナダ戦争博物館のパネル展示をめぐる論争
 - (1) 問題の戦争パネル展示
 - (2) 連邦上院復員軍人問題小委員会のヒアリング
 - (3) 小委員会の勧告と博物館の方針転換 — 再燃する論争 —
 - (4) パネル展示の修正
3. 歴史普及・啓蒙活動と公的記憶
4. 歴史研究者, 公的記憶, そして戦争の記憶
5. おわりに

1. はじめに

2005年5月8日のV・E・デー(V-E Day), 首都オタワに新カナダ戦争博物館 (Canadian War Museum) がオープンした。連邦議事堂のあるパーラメント・ヒル (Parliament Hill) の西側に広がるルブルトン低地 (LeBreton Flats) の, ブース通 (Booth St.) とオタワ・リヴァー・パークウェイ (Ottawa River Parkway) が交わるオタワ川南岸の地 (1 Vimy Place) に建設された同博物館は, 敷地面積7万5000m², 建物面積4万m²におよぶ。総工費は1億3600万ドルで, うち1600万ドルが募金によって賄われた。片側の銅版屋根がパーラメント・ヒル方向に突き出した

平べったい建物で、これを設計したのは、在日カナダ大使館も手がけた著名な日系カナダ人建築家レイモンド・モリヤマ (Raymond Moriyama) である。氏によれば、同館全体の設計テーマは、「リジェネレーション (再生・復興) (regeneration)」だという。同館の圧巻は、リジェネレーション・ホール (Regeneration Hall)。その窓からは議事堂のピース・タワー (Peace Tower) を見ることができる。敵と味方を表現した両側の壁に挟まれた重苦しく薄暗い階段を降りるにしたがい、ピース・タワーの姿は消え、ウォルター・オールワード (Walter Allward) の彫像「希望 (Hope)」がおぼろげに浮かび上がってくる。右後方には、フランスのヴィミー戦争記念碑 (Vimy Memorial) にある彼の彫像数体が並んでいるのが見渡せる。平和がいとも簡単に崩れ、しかしまた希望へと繋いでいくという、リジェネレーションを表した誠に心憎い演出である。このリジェネレーション・ホールに次いで見事なのは、入口ロビー付近にあるメモリアル・ホール (Memorial Hall) である。薄暗い静寂な空間には無名兵士の墓石が置かれており、11月11日のリメンブランス・デー (戦没者追悼記念日 (Remembrance Day)) の11時には、太陽光がピース・タワーを通して同ホールの窓に射しこむよう設計されている。このホールの広さは81㎡で、兵士1人の「生存圏」9m×9mを意味するという。このホールのみならず、全館を通して9m×9mを基準寸法に設計されている¹。

さて、この新しいカナダ戦争博物館が開館して以来くすぶっていたのが、第2次大戦のパネル展示をめぐる論争であった。それは、戦争の記憶に関わる博物館、復員軍人、そして歴史家²のスタンスを考える契機となった。

戦争の記憶をいかに語るのか。博物館の展示が表象する公的記憶を、個人や集団によって抱かれる個々の様々な記憶といかに折り合いをつけるべきか。記憶の有り様は静態的ではない。しかも、記憶は、展示する側の視線と見る側の視線とが交錯するなかで生成・変容していく。また、歴史研究者が提示する様々な分析・解釈は、公的記憶としていかに受容されるべきなのか。記憶、とりわけ戦争の記憶のあり方をめぐる研究は、近年活況を呈する分野であるが³、カナダの事例に即して論ずるのが本稿である。すなわち本稿では、新カナダ戦争博物館のパネル展示に関する論争を手がかりとして、戦争の記憶のあり方をめぐる様々な立場からの主張を

¹ 拙稿「新しい戦争博物館を訪れて」『ニューズレター』(日本カナダ学会) 第73号、2005年12月、pp.10-11. 同論稿で、新カナダ戦争博物館の開館式典の様や簡単な展示紹介等を行なっている。

² 本稿では、専門的に歴史研究に携わる職業的歴史家を「歴史研究者」と表記し、彼らを含む、アマチュア、プロフェッショナルを問わず、歴史の研究、教育、啓蒙活動に携わる歴史家・組織すべてを「歴史家」と表記する。

³ たとえば、ジョン・ボドナー『鎮魂と祝祭のアメリカ——歴史の記憶と愛国主義』(野村達朗・藤本博・木村英憲・和田光弘・久田由佳子訳) 青木書店、1997年、阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編『記憶のかたち——コメモレイションの文化史』柏書房、1999年、ピエール・ノラ編『記憶の場——フランス国民意識の文化=社会史』(谷川稔監訳) 全3巻、岩波書店、2002~03年、若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史——史誌・記念碑・郷土』名古屋大学出版会、2005年、油井大三郎『好戦の共和国アメリカ——戦争の記憶をたどる』岩波書店、2008年、など。また、戦争の記憶をめぐるのは、1990年代中葉のスミソニアン協会 (Smithsonian Institution) 傘下の国立航空宇宙博物館 (National Air and Space Museum) での「エノラ・ゲイ (Enola Gay)」号展示をめぐる論争がよく知られるが、本稿はカナダのみに焦点をあて、多文化社会における公的記憶のあり方を考察している。もとより、同論争との比較などは、今後の課題としなければならない。同論争については、油井『日米 戦争観の相剋——摩擦の深層心理』岩波書店、1995年、同『なぜ戦争観は衝突するか——日本とアメリカ』岩波書店、2007年。

分析するとともに、カナダにおける歴史あるいは歴史家の役割、カナダと戦争との歴史的な関わり、および、多文化・多民族社会カナダという今日の状況に留意し、公的記憶に関してカナダが抱える課題につき考察したい。

そこでまず、戦争博物館のパネル展示をめぐる論争の推移を論じ、とくに復員軍人と歴史家との主張の相違を明らかにする。ついで、一般市民や生徒・学生に対する歴史への関心を喚起しようとする歴史家や歴史普及・啓蒙団体について論じる。そして、戦争貢献とカナダの自立を密接に結びつけて解釈し、そうした歴史の共有を唱える人びとの存在を示し、彼らの主張が、戦争博物館のパネル展示に対する復員軍人たちの要求と根底では一致していた点を指摘する。最後に、多種多様な移民を抱える今日のカナダにおいて、ポリフォニック（多声的）な記憶を取りこみ公的記憶を構築することの難しさにつき言及する。

2. 新カナダ戦争博物館のパネル展示をめぐる論争

(1) 問題の戦争パネル展示

ここで取り上げる新カナダ戦争博物館〔以下、とくに断らぬ限り、「カナダ戦争博物館」と記す〕のパネル展示論争とは何か。まずは、その経緯を論じておこう。問題となったのは、第2次大戦の連合軍によるドイツへの空爆（1945年2月のドレスデン（Dresden）大空襲など）をめぐるパネル展示の文言であった。

その全文は以下の通りであった。

『戦略的爆撃——長年にわたる論争』

ドイツに対する大規模空爆は、甚大な破壊をもたらし、多くの人命を奪った。

ドイツに対する戦略的爆撃の真価と道徳性をめぐっては、いぜん激しい論争にさらされている。爆撃部隊の目標は、ドイツの都市と工業施設を破壊することで、一般市民の士気をそぎ、ドイツを降伏させることにあった。爆撃部隊⁴とアメリカ軍の攻撃によって、ドイツ人の60万人が死亡し、500万人以上が家を失ったが⁵、戦争末期まで、ドイツの軍事生産をごくわずかしか減じなかった。

(“Strategic Bombing: An Enduring Controversy”)

⁴ カナダ空軍（Royal Canadian Air Force）は、イギリス空軍（Royal Air Force）に編入されていた。

⁵ この空爆における犠牲者は、西ドイツ政府の公的算定によれば、ドイツ全土で46万5000人、これに赤軍の進軍からの避難途中で被害をうけた者を含めると60万人になるとされる。その9割以上が市民で、その過半数を女性が、15%を子供が占めていた。高橋秀寿「グローバル化時代における戦争の記憶——ドイツ人の空襲経験をめぐって」『図書』第706号、2008年1月、p.26。筆者の考察対象は、対ドイツ空爆についてのカナダ人の記憶であるが、対する同論稿は、短編ながらも、ドイツ人の空襲経験をめぐる記憶を論じており、示唆に富む。成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『世界歴史大系 ドイツ史3——1890年～現在』山川出版社、1997年、pp.300-302；木村靖二編『新版世界各国史13 ドイツ史』山川出版社、2001年、pp.332-333。も参照。

Mass bomber raids against Germany resulted in vast destruction and heavy loss of life.

The value and morality of the strategic bomber offensive against Germany remains bitterly contested. Bomber Command's aim was to crush civilian morale and force Germany to surrender by destroying its cities and industrial installations. Although Bomber Command and American attacks left 600,000 Germans dead, and more than five million homeless, the raids resulted in only small reductions in German war production until late in the war⁶.)

英文にして70語に満たぬ上記の文言が、復員軍人やそれに共鳴する政治家の反発を呼ぶことになった。パネル展示では、爆撃部隊が過酷な状況下で闘い、4人に1人が死亡という多大な犠牲を払ったことが記されていないばかりか、ドイツ側の60万人以上の死亡の責任が爆撃部隊に負わされているかのように受けとられかねない点に対して、彼らは不満を申し立てたのであった。こうした不満は、新カナダ戦争博物館の開館の時点から出されていたが、博物館側は譲らなかつた。

しかし、2006年11月、カナダ文明博物館法人 (Canadian Museum of Civilization Corporation CMCC)⁷評議会の下部組織である戦争博物館委員会の委員長 (Chairman of the War Museum Committee) で退役大将 (General (Retired)) のポール・マンソン (Paul Manson) が本件をとりあげ、復員軍人らの修正要求を支持し、カナダ文明博物館法人評議会に対して対応を求めたのであった。これを受けて、同法人総裁兼 CEO (President and Chief Executive Officer, Canadian Museum of Civilization Corporation) ヴィクター・ラビノヴィッチ (Victor Rabinovitch) は、4名の著名な歴史家 (歴史研究者) に諮問したが、最終的に博物館側は、パネル展示の変更を行わない旨の決定を下した⁸。

(2) 連邦上院復員軍人問題小委員会のヒアリング

前述のカナダ戦争博物館の決定に対して、復員軍人たちの不満はおさまらなかつた。そして、この問題は、ついに政治の舞台に持ちこまれた。2007年4月、連邦上院の国家安全・防衛常設委員会 (Standing Senate Committee on National Security and Defence) の復員軍人問題小委員会 (Subcommittee on Veterans Affairs) (委員長はジョゼフ・A・デイ上院議員 (Hon. Joseph A. Day)) がこの問題を取りあげたのである。同小委員会は、パネル展示をめぐるこの論争は、復員軍人側の主張が事実と感情に基づいているのに対し、博物館側は事実と学問的客観性に基

⁶ カナダ戦争博物館のパネル展示より。原文は、英仏両語で書かれている。

⁷ 1990年7月1日発効のミュージアム法 (Museum Act) によって、カナダ文明博物館法人が設けられ、カナダ戦争博物館は、カナダ文明博物館 (Canadian Museum of Civilization) とともに、カナダ文明博物館法人の傘下におかれた。

⁸ "An Enduring Controversy: The Strategic Bombing Campaign Display in the Canadian War Museum", *Interim Report of the Subcommittee on Veterans Affairs of the Standing Senate Committee on National Security and Defence*, June 2007. (<http://www.parl.gc.ca/39/1/parlbus/commbus/senate/com-e/defe-e/rep-e/rep16june07-e.htm>, accessed on August 30, 2007.) なお、本稿で使用した史料 (政府文書、新聞等) のうち、ウェブサイトを参照した場合は、初出で URL とアクセス日を記した。記載なしは、現物閲覧の史料である。

づいているという「非対称的」なものであり、小委員会としては、歴史をめぐる議論に介入するのではなく、この論争を効果的な解決策に向け円滑にすすめるのが目的だとした⁹。

そして、同小委員会は、博物館側と復員軍人側双方のほか、その他有識者に対してもヒアリングを行なった。4月18日に召喚されたのは、カナダ在郷軍人会全国議長 (Dominion Secretary, Royal Canadian Legion) で退役准将 (Brigadier-General (Retired)) のドゥアン・デイリー (Duane Daley), 退役中佐 (Lieutenant-Colonel (Retired)) でカナダ空軍協会副会長 (Executive Director, Air Force Association of Canada) のデーン・C・ブラック (Dean C. Black), 航空機乗組員協会トロント支部長ドナルド・エリオット (Donald Elliott, Chairman of the Toronto Branch, Aircrew Association), そして一個人として退役陸軍中將 (Lieutenant-General (Retired)) ウィリアム・カー (William Carr) の4名であった¹⁰。5月2日には、ラビノヴィッチのほか、カナダ戦争博物館長兼CEO (Director and Chief Executive Officer, Canadian War Museum) のJ・ゲーツ (J. (Joe) Geurts), カナダ戦争博物館研究・展示部長 (Director, Research and Exhibitions, Canadian War Museum) デーン・オリヴァー (Dean Oliver), 歴史家 (歴史研究者) 一個人としてジャック・グラナツテイン (Jack Granatstein) の4名が呼ばれた。さらに、同月9日には、退役大将でカナダ防衛協会研究所会議議長 (President, Conference of Canadian Defence Associations Institute) の前述のポール・マンソン¹¹, トロント大学政治学部准教授でカナダ研究・移民およびガヴァナンス講座特任 (Associate Professor and Canada Research Chair in Immigration and Governance, University of Toronto) のランドール・ハンセン (Randall Hansen), 歴史家 (歴史研究者) 一個人としてセルジュ・ベルニエ (Serge Bernier) が、16日には、退役中佐でロイヤル・ミリタリー・カレッジ非常勤教員 (Adjunct Professor, Royal Military College of Canada) のデイヴィッド・バショウ (David Bashow) と、アルゴンキン・カレッジ教授で保存・応用博物館学プログラム・コーディネーター (Program Coordinator, Professor of Conservation, Applied Museum Studies Program, Algonquin College) のテリー・クインラン (Terry Quinlan) がヒアリングに応じた¹²。以下では、復員軍人側、博物館側双方の主張と歴史家の主な主張を取り上げてみよう。

2006年11月に戦争博物館委員会に対して本件を審議するよう委員として進言した「本論争の仕掛け人」ドゥアン・デイリーは、復員軍人側の代表として尋問のなかで次のように述べていた。「……我々の新しい博物館に対して、そして、復員軍人について物語る素晴らしい展示を実現しようとする並々ならぬ尽力に対して、我々は大いなる誇りを抱いている。とくに、空中戦に関する展示は優れている。しかしながら、空爆展示については、そうとは言えない。……復員軍人らは、論争が過去において存在し、今なお存在するという点を否定しているわけでは

⁹ “An Enduring Controversy: The Strategic Bombing Campaign Display in the Canadian War Museum”.

¹⁰ *Proceedings of the Subcommittee on Veterans Affairs*, Issue4-Evidence-April 18, 2007. (<http://www.parl.gc.ca/39/parlbus/commbus/senate/Com-e/vet-e/04evb-e.htm?Language...>, accessed on August 31, 2007.)

¹¹ マンソンは、2000年10月から2006年12月まで、カナダ文明博物館法人の評議会委員であり、その間カナダ戦争博物館委員会の委員長をつとめた。彼はまた、新カナダ戦争博物館の設計から建設にいたるまで、カナダ戦争博物館建設委員会委員長であった。*Proceedings of the Subcommittee on Veterans Affairs*, Issue5-Evidence-May 9, 2007. (<http://www.parl.gc.ca/39/1/parlbus/commbus/senate/Com-e/vete-e/05evb-e.htm?Language...>, accessed on August 31, 2007.)

¹² *Proceedings of the Subcommittee on Veterans Affairs*, Issue5-Minutes of Proceedings. (<http://www.parl.gc.ca/39/1/parlbus/commbus/senate/Com-e/vete-e/05mn-e.htm?Language...>, accessed on August 31, 2007.)

いのだ。それは、学者や歴史家の領域だ」と。このように論争の存在を否定しているわけではないことを明確にした上で、論争については、博物館側が諮問した歴史家4人の間でも意見が分かれていた点を指摘し、にもかかわらず、展示はバランスがとれているとして修正をしなかった博物館の姿勢を糾弾した。そして、「カナダ復員軍人会の40万人の会員を代表して、勇敢な空爆部隊の復員軍人の支持を受けて、〔カナダ〕復員軍人会は、カナダ上院がカナダ戦争博物館館員に対して、『長年にわたる論争』と題するパネルとそれに付随した死亡した市民の写真ははずすよう促すことを要求する。復員軍人会は、博物館が空爆作戦の展示を修正し、空爆部隊の復員兵が戦争の終結を早め、勝利に貢献するために払った多大な犠牲を強調するよう求める」と主張したのである。最後にデイリーは、カナダ戦争博物館とカナダ文明博物館が同一法人の下にあることには無理があると指摘し、前者は、復員軍人、カナダ軍の高官、歴史家、国民代表からなる別個の理事会で運営されるべきであるとした¹³。

また、ブラックは、2006年10月のカナダ空軍協会年次大会での決議を示すとともに、論争については、戦略的爆弾攻撃の有益性を示した歴史家の意見を披歴した。続いて、イギリス空軍第99飛行中隊 (99 Squadron, Royal Air Force) の航空士 (navigator) で、後に弁護士となったエリオット (90歳) は、ドイツ軍に撃ち落とされた自身の体験に基づき、空爆部隊のカナダ兵は、正戦 (just war) を遂行しているとの信念に励まされ、ナチスが支配する危険なヨーロッパの空をめざしていたと語った。そして、「今、パネルとそれに付随する写真は、私が直面した危険に遭う必要がなかった戦後の人びとによってなされたものだが、それは、我々が道義的な犯罪行為に部分的に関与したことを暗に示すものだ。しかも、戦略的な爆弾戦として空爆部隊が遂行した功績に一切言及していないがため、侮辱感は益々強まるのだ」と陳述した¹⁴。

このように、パネル修正を求める復員軍人側は、空爆をめぐる解釈が多様であることを認めながらも、空爆攻撃の役割を評価する歴史解釈があることを傍証に、そして何よりも復員軍人自身の体験を根拠に、彼らの貢献についての記述がない展示は公平さを欠くばかりか、彼らの名誉が汚されると主張したのである。

他方、博物館側はいかなる主張をしたのだろうか。ヒアリングのなかで、カナダ戦争博物館館長ゲーツは、空爆展示の文言は歴史的に正確であり、来館者への重要なメッセージを伝える点においても効果的であると述べ、パネル展示と広い歴史的文脈に照らして、議論の余地無しとの姿勢を崩さなかった。しかも、同博物館は、カナダ在郷軍人会、復員軍人協会全国評議会 (National Council of Veterans Associations)、国防省 (Department of National Defence)、復員軍人省 (Department of Veterans Affairs)、軍部関係者や学識経験者からなる代表を含む諮問委員会 (advisory committee) から様々な角度からの提言に応じてきた点を力説した¹⁵。

また、ラビノヴィッチは、4名の歴史家 (歴史研究者) の意見を徴したことに言及した。その4名とは、カルガリー大学軍事戦略研究所長 (Director of the Centre for Military and Strategic Studies at the University of Calgary) デイヴィド・バーカソン (David Bercuson)、オタワの国防

¹³ *Proceedings of the Subcommittee on Veterans Affairs, Issue4-Evidence-April 18, 2007.*

¹⁴ *Proceedings of the Subcommittee on Veterans Affairs, Issue4-Evidence-April 18, 2007.*

¹⁵ *Proceedings of the Subcommittee on Veterans Affairs, Issue5-Evidence-May 2, 2007.* (<http://www.parl.gc.ca/39/1/parlbus/commbus/senate/Com-e/vete-e/05eva-e.htm?Language...>, accessed on August 30, 2007.)

省歴史・遺産部長で前出のセルジュ・ベルニエ、トロント大学トリニティ・カレッジ学寮長 (Provost of Trinity College, University of Toronto) マーガレット・マクミラン (Margaret MacMillan)¹⁶、マギル大学ハイラム・ミルズ名誉教授 (Hiram Mills Emeritus Professor at McGill University)、デズモンド・モートン (Desmond Morton) で、いずれも傑出した歴史家であった。これら4名に対して、

- 1) カナダ戦争博物館の戦略的空爆作戦に関するセクションは、第2次大戦におけるカナダの役割からみて、バランスがとれているか？ より広範なヨーロッパの軍事作戦における戦略的空爆が果たした役割を説明しているか？
- 2) 『長年にわたる論争』と題する現在の戦争博物館のパネル展示の文言に対して批判が寄せられている。同パネル展示は、戦争における空爆作戦の影響に対する現在の評価を適切に示しているか？

という2点について、意見が求められた。

ラビノヴィッチの説明によれば、1) については、全員が一致して、展示が空爆作戦の意図と目標、カナダの役割、カナダやその他連合軍の航空兵が被った犠牲について適切な要約がなされていると答えたという。2) については、2名¹⁷が、空爆作戦の道徳性、効果、犠牲に関する議論が適切に説明されていると回答した。また、残る歴史家2人のうちの1人¹⁸は、空爆作戦について論争があることを認めたくえて、パネル展示にある道徳性に対する疑問についての記述は誰をも傷つけない文言であろうが、現行のパネルと写真は論争を示すには十分には中立的とはいえず、いくつかの可能な変更を示唆した。いま1人の歴史家¹⁹は、写真の選択について懸念を示し、それがパネルを偏向した見解として受けとられかねず、パネル自体必要かどうか疑問だと回答したという。

以上のような答申を踏まえて、空爆作戦の展示は全体として正確でバランスがとれており、変更する理由はない、また、『長年にわたる論争』パネルは、60年余の戦術的空爆に関する基本的な議論を適切に反映している、との結論に達したとラビノヴィッチは説明した。加えて彼は、この論争については研究が進行中であり、新史料が現れた場合は、通常の展示の扱いにならって解釈や文言を修正することになろうと述べた²⁰。

続いて、オリヴァーは、第2次大戦に関する展示ギャラリー全体を説明したのち、懸案のパネル展示の位置づけについて論じた²¹。ゲーツ、ラビノヴィッチ、オリヴァーとも博物館側の代表として、学問的客観性を尊重する方針を遵守し、管理運営的にも必要かつ適切な措置を講

¹⁶ マクミランは、2007年9月、オクスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジ (St. Antony's College) 学寮長に就任した。彼女は、イギリス首相ロイド・ジョージ (David Lloyd George) の曾孫である。

¹⁷ ラビノヴィッチの本証言では明らかにされていないが、この2名がマクミランとモートンであることが、他の証言や報道内容から特定できる。後の2名も特定できる。

¹⁸ バーカソンを指す。

¹⁹ ベルニエを指す。

²⁰ *Proceedings of the Subcommittee on Veterans Affairs, Issue5-Evidence-May 2, 2007.*

²¹ *Ibid.*

じた結果、パネル展示は適切との判断を下したと主張したのである。

では、グラナツティンは、どのような証言を行なったのだろうか。彼は、カナダで最も著名かつ最も多作の歴史家の1人であるばかりか、新カナダ戦争博物館建設の必要性を訴え、7年あまり基金集めに奔走した同博物館の文字通りの立役者である。ヨーク大学 (York University) 名誉教授でカナダ軍事史の大家であり、同大学を退職後、1998年から2000年にかけてカナダ戦争博物館長兼 CEO をつとめたほか、カナダ戦争博物館諮問委員会委員長を5年間、同博物館評議会委員を3年間、それぞれ歴任した。2006年12月にはカナダ文明博物館法人の評議員となり、現在は、戦争博物館委員会の評議会議長でもある。カナダ戦争博物館や政府と太い繋がりをもつ保守的論客と知られるグラナツティンが、いかなる意見を述べたのだろうか。

彼は、同博物館建設などで協力しあった復員軍人ら旧知の友人や同僚を敵に回すことを憂えながらも、自らの意見を陳述した。その一部をやや長くなるが引用してみよう。

「空爆は効果的だったのか？ それによってドイツ人は航空機や何千もの対航空機銃をドイツ防衛に振り向けざるをえなかった。だが、そのほとんどが奴隷的労働に支えられていたドイツの軍需生産は、戦争末期まで増加していた。空爆がなかったらもっと多かっただろうか？ それは確かだ。にもかかわらず、空爆の効果については論争が継続中だ。私自身の個人的見解では、空爆はドイツ国民の本土にもたらした武器であった点で効果的だったとみる。しかし、論争は毎年続いている。

空爆は道徳的だったのか？ 歴史家、哲学者、小説家がこの問題について50年以上にわたって問い、今なお問い続けている。昨年、少なくとも3、4冊の本が英語で発行されたほか、他の言語でも出された。疑いもなく、この問題は、第2次大戦に関する論争で最も熱い論争の1つである。

〔中略〕

もし、私が懸案の60語のパネルを書いたとすれば、おそらく文言は異なっていただろう。他の誰が書いても、文言は異なっていただろう。しかし、思うに、誰が書こうとも、効果と道徳性については挿入しただろう。それらは熱い論争のテーマであり、それゆえ挿入しなければならないのだ。我々はそれを無視して、事実を変えることはできないのだ。論争が存在しないかのように取り繕うことで歴史的な論争をやめるわけにはいかないのだ。もし試みでもしたら、個々人も機関も非学問的になり、愚かですらあるのだ。

効果と道徳性に関する論争があるからといって、それがカナダ空軍の復員軍人の勇敢さを排除するわけではない。彼らは日々任務を遂行したのだ。我々はあらゆる点で復員軍人に負っているのだ。だが、それが歴史にかなうわけではないし、論争が存在するのに存在しないと偽ることは真実にたがうことになる。

カナダ戦争博物館のような優れた博物館はいうまでもないが、良質の博物館とは、歴史的眞実にかなうものでなくてはならない。さもなければ、カナダご自慢 (national bragadocio) の金属、飛行機や車の倉庫同然になろう。良質の博物館には教育的な目的がある。知識を与え (instructs) 教育し (teaches)、そして、これは理想なのだが、来館者に疑問を抱かせ、さらに学ぼうとさせるのだ。第2次大戦に関する大きな問題のいくらかが爆撃に

関することなのは、疑いない。

最後に1点申さねばならない。博物館は、時に事実の誤りを犯すが、それを直ちに修正できる。しかしながら、事実上誰もが事実が述べられていると同意しているのに、そうした事実に対する不満な人びとの要求に応じて変更することは、同種の要求を持つ他の人びとに門扉を開くことになるのだ。カナダ戦争博物館でもっと好意的に、あるいは違うように、それぞれの主義主張を提示してほしいと考える集団や個人が列をなしているのだ。もし、1つのグループのために事実を修正すれば、ひどい先例を作りかねないのだ。そうしたら、戦争博物館は他の人びとにどうやって抵抗できようか?」²²]

グラナツティンは、様々な論争の存在を提示することが最も適切な展示のあり方であること、そして、歴史を考える教育的効果としての博物館の役割に言及しながら、新カナダ戦争博物館建設では協力関係にあった復員軍人たちの主張に対して異を唱えたのである。さらに留意すべきは、上記の引用の最後に示された点である。すなわち彼は、復員軍人らの要求を受け入れることが、様々な利害・見解をもつ他の集団・個人の要求に応えねばならなくなる事態を招くのを懸念していたのである。実際、たとえば、全カナダ日系人協会 (National Association of Japanese Canadians) が、第2次大戦の強制収容に関する展示が、強制収容の原因として人種主義の側面を軽視しており、他方で、そうした差別的な扱いにもかかわらず兵役を志願した日系人の存在への言及がないとして、パネル展示の修正をカナダ戦争博物館に対して求めていた²³。

グラナツティンは、多文化主義の下で様々な人びとが彼ら自身の「ポリティカル・コレクトネス (political correctness)」を求め彼ら自身の記憶の公的認知を主張することが、公的記憶の形成・共有を阻害すると考えているといえよう。換言すれば、彼は、学問的な客観性を根拠に、論争を示したパネル展示の現状維持を主張することで、復員軍人よりも「手ごわい」エスニックな人びとのポリフォニックな記憶によって公的記憶が解体ないしは断片化させられることを警戒したのであって、復員軍人と対立したというよりは、むしろ妥協していたといえよう。この点については後に敷衍しよう。

さて、ヒアリングに応じたその他の歴史家の回答はどうだったのだろうか。トロント大学のハンセンは、第2次大戦下のドイツの研究のほか、戦後イギリスの移民政策や欧米の優生政策の研究など、広範な関心をもつ、欧米のメディアでもしばしば登場する気鋭の歴史・国際政治学者である²⁴。彼は、自身の主張を3点に要約していた。すなわち、第1に、展示の文言は、正しいと認められた事実であり、妥当である。第2に、展示の文言が空軍パイロットを戦争犯罪者であるかのごとく暗示しているとの議論は、誤っている。そして第3に、歴史的正確さを保持し、同時に、復員軍人を満足させるように、展示の文言を改訂することは不可能であると指摘した²⁵。

²² *Ibid.*

²³ *Globe & Mail*, August 29, 2007.

²⁴ ハンセンは、連合軍のドイツ空爆に関する書を著した。Randall Hansen, *Fire and Fury: The Allied Bombing of Germany 1942-1945*, Scarborough, 2008.

²⁵ *Proceedings of the Subcommittee on Veterans Affairs*, Issue5-Evidence-May 9, 2007.

また、フランス系カナダ人歴史家ベルニエは、2006年秋にカナダ文明博物館法人が開いた諮問委員会での自身の回答を敷衍し、写真の選択の仕方について言及した。すなわち、歴史家は往々にして文章説明を示すために写真を用いるが、写真自体が物語を語る点に留意すべきだとした。そして、写真史料の批判的分析が必要だとした。さらに彼は、政治的圧力に屈したかのように解釈されるような展示の改訂は好ましくないし、それは、カナダ戦争博物館もカナダ人歴史家も受け入れ難いこととした²⁶。

以上みてきたように、連邦上院の復員軍人問題小委員会でのヒアリングでは、復員軍人側に対して、博物館側と歴史家たちが対立する陳述をしたのであった²⁷。

(3) 小委員会の勧告と博物館の方針転換 — 再燃する論争 —

前節でみた一連のヒアリングを踏まえて、復員軍人問題小委員会は、2007年6月、次のような勧告を出すにいたった。

「しかるべき協議をへて、本小委員会は、カナダ戦争博物館が、この論争を率先して解決すべく、公的な責任と専門的な能力を有すべきだと勧告する。我々は、同博物館が、懸案のパネル展示の詳細な説明を検討し、これまでと同様に歴史的に正しい資料説明を提示する代替策を考慮し、そうすることで、空軍復員軍人が受けた屈辱を取り除き、一般市民がこれ以上誤解しないようにすべきだと考える²⁸」。

このように、同小委員会は、カナダ戦争博物館に対してパネル展示の文言を修正するよう勧告したのである。これを受けて、カナダ戦争博物館は、どのような対応をしたのだろうか。

同年8月末、カナダ戦争博物館は、数週間のうちにパネル展示の文言修正の検討に入り、10月までに最終案を決定する旨、発表した²⁹。ラビノヴィッチは、「博物館のスタッフと専門的歴史家が文言を書くが、その文言は、〔復員軍人への〕敬意の念によって導かれるべきだ」「歴史的记录に忠実でありながら、敬意を取りこむ方法をみつけるのだ」と述べている³⁰。

それまで文言修正の必要なしとの主張をしてきた同博物館の方針転換は、苦渋の決断だったといえる。もとより、博物館内の事情を察することは難しい。だが、同博物館評議会議長にイートン百貨店で知られるイートン家出身でイギリス高等弁務官 (High Commissioner) を務めたフ

²⁶ *Ibid.*

²⁷ カナダ歴史協会 (Canadian Historical Association) は、2007年5月、サスカチュワン大学 (University of Saskatchewan) で開かれた年次大会で、戦争展示パネルの解釈を問題として取り上げた連邦上院に対して抗議する決議を採択し、2005～07年度の会長マーガレット・コンラッド (Margaret Conrad) は、上院に対して、本件の政治化に抗議するとともに、専門家のフォーラムで取り組む方が良策であることを訴えた。だが、同協会の要求は無視された。CHA President's Report, May 2007. (http://www/cha-shc.ca/english/info/report-rapport_2007.cfm, accessed on April 29, 2008.); CHA News, Bomber Command Panels at the Canadian War Museum, Jan. 14, 2008. (http://www.cha-shc.ca/English/news_nouvelles/story.cfm?id=38, accessed on April 29, 2008.)

²⁸ "An Enduring Controversy".

²⁹ *National Post*, August 28, 2007; *CTV News*, August 28, 2007. (http://www.ctv.ca/servlet/ArticleNews/story/CTVNews/20070828/war_museum_070828/2..., accessed on August 30, 2007.); *Globe & Mail*, August 29, 2007.

³⁰ *Globe & Mail*, August 29, 2007.

レデリック・S・イートン (Frederik S. Eaton) が就任した2週間後³¹, そして, 上院小委員会の先述の勧告が出された数日後に, 館長のゲーツが辞職しており, 辞職の理由は明らかにされていないが, 博物館の独立性を頑なに守ろうとするゲーツと, 復員軍人との妥協を図ろうとするラビノヴィッチらの柔軟派との路線の相違があったと推測されている³²。

いずれにせよ, 上院小委員会の勧告後, カナダ戦争博物館がパネル展示の文言修正に応じる決断を下したことは, 復員軍人と博物館との対立, および, ヒアリングで明らかとなった復員軍人と博物館・歴史家との対立において, 「復員軍人側の勝利³³」と受けとめられた。同博物館の方針転換に対して, マスコミには様々な意見が寄せられたが, 基本的には, 復員軍人と歴史家との対立であった。以下では, 再燃した論争をみてみよう。

2007年8月29日付『グローブ・アンド・メール (Globe & Mail)』紙は, かつてカナダ戦争博物館諮問委員会に呼ばれたマクミランのコメントを載せていた。「復員軍人の勇敢さに異議を唱える者は, 誰もいない。だが, 博物館は戦争記念物 (war memorial) ではない」「復員軍人が満足のいくよう展示を変える決定を下せば, 声高に叫ぶ者なら誰であれ, その見解が認知されるだろう」と³⁴。特定の集団の主張・抵抗に抗しきれず, それに応じて文言を修正していけば, 歴史的客観性が失われていくことを憂慮したのである。

また, 翌8月30日の同紙社説は, 第1級の学問的内容を提示すべきとする主張と復員軍人の主張との折り合いをつけることが, 果たしてラビノヴィッチが言うように可能なかどうか, 疑義を呈していた。そして, 先述のマクミランのコメントを引き, 「不幸にも, 博物館は, 彼女の助言を無視しているようだ。勝者が自身の歴史を書くがゆえに, 歴史が勝者をどのように扱うかを勝者が確かめるのは, 自明の理だ。だが, 彼ら勇敢な航空兵たちは, 彼らの上官の決定をめぐるいささかの論争も取り除こうとすることで, 恥ずべき行ないをしているのだ。博物館は確固とした姿勢をとるべきだ」³⁵ と述べていた。

さらに, 8月31日付の『トロント・スター (Toronto Star)』紙は, 前日の『エドモントン・ジャーナル (Edmonton Journal)』の社説を編集して掲載していた。そのタイトルは「戦争博物館での意気消沈させる降服」であった。同記事は, これまでの経緯を説明した後, グラナツティンの連邦上院小委員会ヒアリングでの発言について特筆していた。カナダ戦争博物館の立役者にして保守的論客であり, 復員軍人と繋がりのある彼が, パネル展示の文言修正に応じるべきでないとの論陣をはったことを強調し, にもかかわらず博物館が姿勢を変えたことは至極遺憾としたのであった³⁶。

『グローブ・アンド・メール』, 『トロント・スター』両紙とは対照的に, 『ナショナル・ポスト (National Post)』紙は, カナダ戦争博物館の決定を歓迎する見解を示していた。8月29日

³¹ 『グローブ・アンド・メール』紙は, イートンが「[カナダ戦争] 博物館は, 偏向している。博物館が復員軍人と争うのは好ましくない。私は, 解決を成し遂げる決意である」と述べ, 率先して議長に就任したと報じている。Globe & Mail, August 29, 2007.

³² National Post, August 28, 2007; Globe & Mail, August 29, 2007; Toronto Star, August 31, 2007.

³³ National Post, August 28, 2007.

³⁴ Globe & Mail, August 29, 2007.

³⁵ Globe & Mail, August 30, 2007.

³⁶ Toronto Star, August 31, 2007.

の同紙は、「我々の復員軍人に敬意を払うこと」と題する社説を載せている。「オタワのカナダ戦争博物館をめぐる嘆かわしい長期化した論争は、終結に向かいつつあるようだ。……我々の復員軍人は功績があり、博物館が同意したことを喜ばしく思う。……もとより、復員軍人は、特別な利害集団どころではないのだ。そうでないから、このような論議は歴史となるのだ。しかも歳月が過ぎれば、復員軍人の数はもっと少なくなり、彼らがいかに犠牲を払ったのかについて我々が想起することができなくなるのだ。我々が彼らにできる最低限のことは、彼らの懸念を真摯に受けとめることだ³⁷」。このように同紙の論説は、復員軍人は「国家（国民）の語り」の枢要な位置にある特権的な人びとであり、彼らの高齢化とともに記憶の闇に葬り去られる前に、彼らの功績を讃える必要性を説いていた。

この論説は明らかに復員軍人寄りだが、同紙は、これに反論する歴史家の見解も報道していた。たとえば、翌8月30日の同紙は、連邦上院小委員会に召喚されたハンセンへのインタビュー記事を掲載している。ハンセンは「この決定は、本質的にも、決定過程においても、全くひどい」「博物館が効果的に政治化され、博物館に寄せる期待と正反対になるのをお望みなら、異様ではない」とし、さらに、カナダ兵の空爆で多数の犠牲者を出したことは紛れもない歴史的事実であり、第2次大戦の文脈で判断を下す自由があること、そして、なかったかのように沈黙を強いるのは無謀だとした。この記事には、やはり小委員会に出席したマンソンの意見も掲載されたほか、「我々は歴史を隠蔽する（whitewash）わけではない。歴史修正主義者になるつもりはないのだ」とするラビノヴィッチによる博物館側の立場も紹介していた³⁸。なお、同紙は、翌日、ハンセンによる署名記事を掲載した。その内容は、連邦小委員会でのヒアリングでの回答とほぼ同内容であるが、彼は「この結果は遺憾以上である。それは、国家の恥である」と締め括っていた³⁹。

読者からの投稿でも、賛否両論が寄せられていた。そのいくつかをみておこう。賛成側からは、やはり復員軍人、あるいはその遺族からの投書が多くみられた。オンタリオ州バーリントン（Burlington）在住の復員軍人は、ハンセンの意見に対して、「トロント大学の心地よい椅子〔講座〕（chair）から」そう言えるのであって、我々の功績がなければ「トロント大学のキャンパスもゲシュタポに監視されているだろう」とし、彼のような見方こそ「国家の恥」だと反論していた⁴⁰。これに類似した投書として、オンタリオ州マーカム（Markham）居住者から、マ

³⁷ *National Post*, August 29, 2007.

³⁸ *National Post*, August 30, 2007. なお、ラビノヴィッチは、同年9月下旬、日本カナダ学会年次研究大会の基調講演者として来日し、講演を行なったほか、シンポジウム「記憶のかたち」のパネリストをつとめた。筆者は、同シンポジウムのディスカッサントとしてコメントした際、この戦争パネル展示論争に言及した。これに対して氏は、大きな論争に発展したことへの驚きを述べるとともに、様々な記憶から選択することの難しさにも言及し、選択の際には多様な人びとへの敬意を払うべきだとする氏の基本的立場を述べるとどまった。当時おそらく新しい文言を検討中であつたはずだが、その文案方針を具体的に語ることはなかった。

かねてより筆者は、カナダにおける公的記憶と歴史家・歴史研究について関心を抱いていたが、本シンポジウムに参加することで、この問題をより深く考える機会が与えられた。その機会を与えて下さった同学会関係者、とりわけ溝上智恵子筑波大学教授に感謝したい。なお、ラビノヴィッチの基調講演は、次に収録されている。Victor Rabinovitch, "Diversity, Identity and Historical Voices in a Canadian National Museum", *Annual Review of Canadian Studies* (Japanese Association for Canadian Studies), Vol.28, 2008.

³⁹ *National Post*, August 31, 2007.

⁴⁰ *National Post*, September 1, 2007.

クミランが批判できるのもカナダ復員軍人の犠牲を払ったお蔭だとする意見も出された⁴¹。また、ヴァンクーヴァー (Vancouver) 在住の復員軍人は、年若き青年たちが戦地に赴いたのは命令に従ったからだ。祖国のために戦い犠牲を払った青年たちに空爆の責任を負わせるのは無分別だとし、さらに、「ドイツへの空爆も、広島への原爆投下も、戦場での若者の死を救ったのだ。これらの爆撃は価値がないのか？」と論じていた⁴²。また、ブリティッシュ・コロンビア州パークヴィル (Parkville) からは、父親が遺した航行日誌から、空爆作戦の目標は鉄道操車場、潜水艦基地、工業施設などであり、空爆は戦略的であり、戦争を短縮するためにも必要だったと述べていた⁴³。自らの（あるいは肉親の）戦争体験があるだけに、感情的な投書もあるが、自らの記憶と歴史解釈のせめぎあいを読みとれよう。

そのほかの投書にも、一般の人びとの歴史に対する見方をかいまみることができる。たとえば、バーリントン在住のある読者は、後世になって過ちだと解釈されても、当時の状況においてはそうではなかった。したがって、事が起きた時点の文脈で考えるべきとしていた⁴⁴。また、オンタリオ州タラ (Tara) からは、「歴史は流動的であり、解釈は変わるのだ。一握りの歴史家、学芸員が彼らの意見を復員軍人に押しつけるのは尊大で傲慢だ」とする意見が寄せられていた⁴⁵。これらの投書は、歴史認識論に関わる問題を言い当て、歴史に様々な解釈が成り立つことを指摘している。歴史の解釈については、戦時に空軍女性補助隊 (Women's Auxiliary Air Force) にいたオンタリオ州ミシサガ (Mississauga) 在住の女性が、「博物館の目的は、関係ある歴史的文物を展示することであり、コメントや批判をするのではない。見る側の判断に委ねるべきだ」とする投書を寄せていた⁴⁶。博物館の展示自体、すでに1つの解釈であり、見る側の判断にすべてを委ねることは、もとより不可能であろう。しかし、この投書は、解釈をめぐる不毛な論争に辟易したものと解せよう。いずれにせよ、これらの投書は、ナイーヴな意見とは決して言えず、公的記憶にかかわる歴史解釈と歴史家の役割を考えるのに重要な論点を提示していた。この点をまとめる前に、先に反対論の投書のみておこう。

反対論の大半は、歴史家から出されていた。すでにマクミランやハンセンらの論説を紹介しており、屋下に屋を架すことを避けるため、興味深い2つの記事をあげるにとどめよう。カルガリーのカレッジの歴史教師は、カナダ戦争博物館が公共機関ゆえに、展示の文言を修正するのはおかしい。現行の文言はヨーロッパにおける第2次大戦に関する現在の我々の歴史認識を正確に反映している、とした⁴⁷。学問的な客観性の喪失を憂えるのと同時に、公共博物館の政治化、つまり公的記憶の政治化を憂慮する意見である⁴⁸。

⁴¹ *Toronto Star*, September 1, 2007.

⁴² *National Post*, September 1, 2007.

⁴³ *National Post*, September 1, 2007.

⁴⁴ *National Post*, September 1, 2007.

⁴⁵ *Globe & Mail*, August 30, 2007.

⁴⁶ *National Post*, September 1, 2007.

⁴⁷ *National Post*, August 29, 2007.

⁴⁸ カナダ戦争博物館の方針決定発表時、筆者はトロント滞在中であり、ラムゼイ・クック (Ramsay Cook) ヨーク大学名誉教授、イアン・ラドフォース (Ian Radforth) トロント大学教授に直接インタビューを行なった。また、マイケル・ビヒールズ (Michael Behiels) オタワ大学 (University of Ottawa) 教授、アラン・スミス (Allan Smith) ブリティッシュ・コロンビア大学 (University of British Columbia) 教授に対しても電子メールにてインタビューを行なった。いずれも同様の見解であった。

この公的記憶の政治化については、オタワ大学で国際公共政策を講ずる教師（したがって歴史家ではない）が、次のような指摘をしていた。「歴史は静的ではない。歴史の解釈を変え、その様相や方向性に影響を与えたいと望むのなら、政治的影響力の行使によってなされるべきではない。調査し、史料で実証することですべきなのだ」と。しかも、歴史の歪曲の例として、日本に言及し、「日本人は、政治的に誘発された健忘症に罹った、世界で最も痛烈な例である。1931年以降、両親や祖父母たちが征服した人びとに何が起きたのか、ほとんどは全く知らない。日本は外国の侵略の被害者だと教えられており、広島や長崎での犠牲者の強烈な意識を、当然ながら抱いているのだ。日本は、真実よりも政治的便宜に順応した歴史をあてがっている」とした⁴⁹。なお、その1週間後、この記事に対して、駐カナダ日本公使が、日本人はアジアの近隣諸国などに与えた被害を認識しており、歴史教育においても無視しておらず、また、政治指導者が謝罪をしていると反論した⁵⁰。

以上、カナダ戦争博物館がパネル展示の文言修正に応じるとの方針転換を下したことに対する反応について、新聞報道を分析した。賛成、反対の両意見は、公的記憶にかかわる歴史解釈と歴史家の役割を考察するうえで重要な論点を提示していたといえよう。

それはまず、体験した者でないと語れない記憶と、後世になって史料をもとに描く歴史との間に開きがあることである。復員軍人は自らの体験をもち、それがその後の人生に影響を与えてきた。これは「身体化された記憶」である。この「身体化された記憶」と、後世の、ないしは体験したことの無い歴史家が過去の痕跡である史料を用いて事実をつきとめ解釈を下すことの間には、乗り越え難い溝がある。

それでは、歴史家はその溝を埋めようとしてきたのだろうか。歴史家、とくに、歴史研究を生業とする専門的歴史家である歴史研究者は、学問的客観性を追究し、史料による裏づけをとりながら歴史を描き、解釈を下す。そして、その解釈をめぐる論争を繰り返す。こうした学問的営為のなかで、先に述べた「身体化された記憶」や、体験した、しないにかかわらず形成された曖昧な記憶を、信頼に足らぬ記憶、さらには「学問的でない歴史」として往々にして排除する傾向があったといえる。これこそ、誤解を怖れずに言えば、歴史研究者の「横暴さ」であり、そこに知の権威主義が存在している。先にみた反対論の投書は、学問的客観性を理由に、「身体化された記憶」や曖昧な記憶を排除する歴史家の姿勢を批判したともいえよう。さらにまた、学問的客観性を追究する歴史研究者が、緻密な実証に走り、それが一般の人びとの歴史に対する関心を削いでいった点も付け加えねばならない⁵¹。もとより、歴史研究者の間でも、全体史の記述は必要としながらも、緻密な実証を積み重ねても必ずしも全体史にならないジレンマを抱えている。また、「国家（国民）の語り」にむしろ回収されない様々な側面に光をあ

⁴⁹ *Globe & Mail*, August 30, 2007.

⁵⁰ *Globe & Mail*, September 6, 2007. なお、同記事に対して、翌7日、「日本で主に高校生や大学生に英語を教えて帰国したばかり」というトロント在住者から、「日本がなぜ中国や朝鮮（Korea）を侵略したかと尋ねると、ほとんど誰もが答えられなかった。植民地化の時代が何年に始まり、何年に終わったのか大半は言えなかった」とする投書が掲載された。*Globe & Mail*, September 7, 2007.

⁵¹ cf. Felipe Fernández-Armesto, "Epilogue: What is History Now?", in David Cannadine (ed.), *What is History Now?*, London, 2002 [フェリペ・フェルナンデス＝アルメスト「第9章 エピローグ——いま歴史とは何か」(岩井淳訳) D・キャナダイン編著『いま歴史とは何か』(平田雅博・岩井淳・菅原秀二・細川道久訳) ミネルヴァ書房, 2005年].

てる歴史研究もある。こうした「ミクロ・ヒストリー (micro history)」を「大きな物語 (grand narrative)」といかに接合すべきか、歴史研究方法論上の大きな問いである。

では、一般の人びとと歴史との距離を縮めるにはどうすればよいのか。博物館はまさにその恰好の場であり、公的記憶を人びとに伝える重要なメディアの1つと位置づけられてきた。その際、学問的な客観性を失わず、かつ、公的記憶の政治化を回避することはいかにして可能か。カナダ戦争博物館のパネル展示をめぐる論争で、博物館といった公共の場において、公的記憶をいかに伝えるのかが争点となった。同論争は、一般の人びとと歴史家、とりわけ復員軍人と歴史家との認識の隔たりの存在を認識させ、公的記憶の形成における歴史家の果たすべき役割を考える一契機となったのである。そこで次に、公的記憶と歴史家との関わりを、戦争パネル展示の個別問題から離れ、より広い文脈で考えてみたい。それによって、パネル展示をめぐる論争では、復員軍人対歴史家と思われた対立の構図が、実際には複雑であったことが明らかになるであろう。

その考察に先立って、このパネル展示論争の結末について触れておこう。

(4) パネル展示の修正

カナダ戦争博物館では、8月末に公表した方針にしたがい、パネル展示の文言の修正案が練られた。そして、10月10日、同博物館は、以下のように修正すると発表した。

『爆撃作戦』

ドイツに対する戦略的爆撃作戦は、連合軍の勝利をもたらした作戦の重要な一部をなすが、今日、いぜんとして論争の源である。

戦略的爆撃は、連合軍の不屈の象徴、かつ、ドイツの侵略への応戦として、社会や国家の幅広い支持を得ていた。初期においては、空爆攻撃の目的はほとんど達成できず、多大の犠牲を被った。技術力や戦術が向上し、加えて、他の戦線で連合軍が勝利したことで、事態は改善に向かった。戦争終結の頃には、連合軍の爆撃機は、ドイツの主要都市すべての一部をことごとく壊滅させ、石油施設や輸送網を含む、その他の攻撃目標を破壊した。攻撃によって、ドイツの経済・軍事の潜在能力を弱体化させ、窮乏した資源を防空や被害応急対策、最重要産業保護へと振り向けさせた。

連合軍の航空兵は、極めて不利であったにもかかわらず、この苛酷な攻撃を遂行した。資源・産業両面での甚大な努力を要したほか、連合軍は、カナダ兵1万人強を含む、8万人以上の犠牲を払った。攻撃によって敵の戦意喪失を大いに促したが、ドイツは、60万人の死者と500万人以上のホームレスを出したにもかかわらず、崩れなかった。工業生産高は大きく落ち込んだが、それは戦争末期になってからであった。人口過密な地域への爆撃の効果と道徳性をめぐって、論争が継続中である。

“The Bombing Campaign”

The strategic bombing campaign against Germany, an important part of the Allied effort that achieved victory, remains a source of controversy today.

Strategic bombing enjoyed wide public and political support as a symbol of Allied resolve and a response to Germany aggression. In its first years, the air offensive achieved few of its objectives and suffered heavy losses. Advances in technology and tactics, combined with Allied successes on other fronts, led to improved results. By war's end, Allied bombers had razed portions of every major city in Germany and damaged many other targets, including oil facilities and transportation networks. The attacks blunted Germany's economic and military potential, and drew scarce resources into air defence, damage repair, and the protection of critical industries.

Allied aircrew conducted this grueling offensive with great courage against heavy odds. It required vast material and industrial efforts and claimed over 80,000 Allied lives, including more than 10,000 Canadians. While the campaign contributed greatly to enemy war weariness, German society did not collapse despite 600,000 dead and more than five million left homeless. Industrial output fell substantially, but not until late in the war. The effectiveness and the morality of bombing heavily-populated areas in war continue to be debated⁵².)

上記のように、当初の文言のおよそ3倍の分量となったのである。ゲーツの辞任後、カナダ戦争博物館長代行となったマーク・オニール (Mark O'Neill) のコメントによると、この新しい文言は、博物館員はもとより、館外の専門家、カナダ在郷軍人会やメイデー委員会 (Mayday Committee)⁵³などの復員軍人組織との協議をへて作られたものであり⁵⁴、4つの大きな変更がなされたという。それは第1に、空爆作戦に対して当時の社会も国家も支持をしていた点について述べていること、第2に、戦術的目標について具体的に述べていること、第3に、不利な状況下にもかかわらず、航空兵が勇敢であった点に触れていること、第4に、カナダなど連合軍側にも人的犠牲があった点に言及していることであった⁵⁵。

この新しくなった文言に対して、たとえば、カナダ在郷軍人会のデイリーは「元の文言よりも3倍あり、より多くのコンテクストを加えている」と評価し、同会スポークスマンのボブ・バット (Bob Butt) は、「当会は、結果に満足している。そこ〔文言〕には、勝者も敗者もないのだ」とのコメントを発表した。

60数語で全てを説明すること自体難しかったがために、分量を増やすことである程度は詳しい記述となり、カナダ戦争博物館開館時からおよそ2年半続いた本論争は、一応の決着をみたのである。なお、この文言自体は、12月から変更されることになった。同論争において、復員

⁵² *CBC News*, October 11, 2007. (<http://www.cbc.ca/arts/artdesign/story/2007/10/11/war-museum.html?ref=rss>, accessed on November 1, 2007); *Ottawa Citizen*, October 11, 2007. (<http://www.canada.com/components/print.aspx?id=a03924f2-379c-4103-83ca-97c3d078f40d&k=55...>, accessed on November 1, 2007.)

⁵³ 問題のパネル展示文言の修正を求めて空軍復員軍人を中心に形成されたアドホックなロビー組織。

⁵⁴ *CanWest News Service*, October 10, 2007. (<http://www.canada.com/components/print.aspx?id=4d220fcd-5098-4a27-9b97-fadbd3a3ec36&k=88...>, accessed on November 1, 2007.)

⁵⁵ *CTV News*, October 10, 2007. (http://www.ctv.ca/servlet/ArticleNews/print/CTVNews/20071010/museum_display_071010/200710..., accessed on November 1, 2007.); *CBC News*, October 11, 2007.

軍人組織が大きく関与したことは、ことが戦争に関わるとはいえ、博物館展示という公的記憶の内容に対して特定の集団が関わる先例を作ったといえる。そして、それは、今後のカナダにおける公的記憶の形成のあり方に大きな課題を残したといえよう。

3. 歴史普及・啓蒙活動と公的記憶

これまでみてきたカナダ戦争博物館のパネル展示をめぐる論争は、公的記憶の形成に関わる博物館の役割や歴史家の位置づけ、さらには、一般の人びとと歴史および歴史家との関係について、改めて考えさせるに至ったといえる。この論争では、歴史家と復員軍人とが対立したが、実は、こうした対立の構図は、カナダの歴史家の一面しか表していない。歴史家対復員軍人という対立に一見みえる構図は、実は複雑であり、「ねじれ」があるのである。以下では、歴史家を、歴史研究者のみならず、より広範囲に、一般の人びとに歴史を普及・啓蒙する組織などを含めて考え、彼らとカナダ社会との関わりについて論じてみよう⁵⁶。

現在、カナダには、歴史の普及・啓蒙活動を行なう組織が数団体ある。1994年に設立されたカナダ国民史協会 (Canada's National History Society) は、隔月刊の『ビーヴァー (The Beaver)』誌を発行するほか、夥しい数の歴史物の著作で知られる国民的通俗歴史家 (popular historian) ピエール・バートン (Pierre Berton)⁵⁷ を顕彰し、歴史の普及に尽くした人物に贈るピエール・バートン賞 (Pierre Berton Prize) や、優れたカナダ史教師を表彰するカナダ史教育功労者総督賞 (Governor General's Awards for Excellence in Teaching Canadian History) を設けている。

また、ラディヤード・グリフィス (Rudyard Griffiths) ら「カナダにおける共通の記憶と市民アイデンティティの浸食 (erosion)」を懸念する少壮のカナダ人グループによって、1997年に設立されたドミニオン・インスティテュート (Dominion Institute) は、単なる歴史の普及にとどまらず、公的記憶における歴史の役割を重視し、歴史の共有こそがカナダ市民意識には必要であるとの明確な目標をもった組織である。実際、彼らは、「カナダの物語についての知識や理解を深めることによって、行動的で教養ある市民を造りあげること (to build active and informed citizens through greater knowledge and appreciations of the Canadian story)」を使命に掲げている⁵⁸。同インスティテュートは、カナダ自治領 (Dominion of Canada) の成立を祝う7月1日のカナダ・デー (Canada Day) やリメンブランクス・デーで、カナダ人のカナダ史の理解度の調査結果を公表することを、設立以来恒例化しているほか、「子供たちやすべてのカナダ人が、我々の歴史を学び、市民意識 (citizenship)、民主主義の制度や価値を共有するのに資すべく、教師や関心をもつカナダ人に、様々な教育プログラム、イヴェント、活用教材 (resources) を提供する⁵⁹」数々の歴史の普及・啓蒙活動を企画遂行している。

⁵⁶ ここでは、学校での歴史教育カリキュラムは扱わない。カナダの歴史教育については、鳥越泰彦「カナダの歴史教育 — 多文化主義とその限界」『教育研究』(青山学院大学教育学会) 第52号, 2008年4月, 同「カナダの歴史教育 — 2007~08年度アルバータ州の教育改革を中心として」『歴史と地理』第614号, 2008年5月。鳥越氏は、カナダの中等教育レベルの歴史教育は、多文化主義的とは到底言えないと結論づけている。

⁵⁷ バートンについては、ごく最近、大部な伝記が出された。A. B. McKillop, *Pierre Berton: A Biography*, Toronto, 2008

⁵⁸ <http://www.dominion.ca/about.htm>, accessed on December 15, 2007.

⁵⁹ <http://www.dominion.ca/programs.htm>, accessed on December 15, 2007.

このうち最大なのは、「メモリー・プロジェクト (Memory Project)」である。2001年から始まったこのプロジェクトは、カナダ全土の1500名以上の復員軍人が学校やコミュニティを実際に訪れて戦争や平和構築の記憶を語るもので、その話題は、第1次大戦から朝鮮戦争や平和維持活動 (Peacekeeping Operation) にいたるまで多様である。あるいはまた、復員軍人のオーラル・ヒストリーや物品がウェブに収録されたデジタル・アーカイブを介して、戦争の記憶に接する場を設けている⁶⁰。このように、戦争や平和構築の記憶をめぐって、復員軍人と青少年たちが結ばれるのである。なお、このプロジェクトは、復員軍人省やカナダ在郷軍人会の協力で進められている。このほか、移民の経験を語るプロジェクト「カナダへの道 (Passages to Canada)⁶¹」や、カナダ史の重要局面をめぐり解釈や歴史の有益性などに関する様々な論客の意見を読ませた上で、自らの意見を発表させる「カナダの大問題 (Great Canadian Questions)⁶²」プロジェクトなどもある。

さらにまた、このほかの団体として、1999年に大企業家の富豪チャールズ・R・ブロンフマン (Charles R. Bronfman) らによって設立されたヒストリカ基金 (Historica) がある。同基金は、先述のカナダ国民史協会やドミニオン・インスティテュートのほか、『カナダ人名事典 (Dictionary of Canadian Biography)』やヒストリー TV (History Television) と共同で、歴史のデジタル・アーカイブの提供など、教育プログラムを実施している⁶³。このほか、カナダ放送協会 (Canadian Broadcasting Corporation) が、2000年末から放映を開始した『カナダ——人びとの物語 (Canada: A People's History)』も、歴史の普及・啓蒙活動とみなしうる。これは、紀元前1万5000年前から1990年代までを扱った全部で17編からなる超大作の歴史ドキュメンタリー番組で、大好評を博した⁶⁴。

こうしたカナダの歴史の普及・啓蒙活動の興隆の背景には、ケベック州分離独立運動があったことは想像に難くない。すなわち、カナダ連邦体制の問題を解決すべく試みられた1990年のミーチ・レイクの合意 (Meech Lake Accord) や1992年のシャーロットタウン協定 (Charlottetown Accord) がいずれも失敗に終わり、また、1995年にはケベック州住民投票が実施され、分離独立推進派が僅差で敗れたものの (50.6%対49.4%)、カナダは分裂の危機にさらされていたからである。歴史的に繰り返されてきたイギリス系とフランス系との対立と共存の試み、さらには、移民の流入にともないますます多元化するカナダ社会の統合には、公的記憶の共有、「国家 (国民) の語り」が必要とされたのである。

公的記憶が語られる場として、これまで述べてきた歴史の普及・啓蒙団体の活動は重要であったが、何よりも充実が求められたのは、公共の博物館、就中、国立博物館であった。2000年にカナダ文明博物館法人総裁兼 CEO に就任したラビノヴィッチは、カナダ文明博物館150周年にあたる2006年、今後の目標として、「歴史的・文化的遺産の番人」として「事物や記憶の収集

⁶⁰ <http://www.thememoryproject.com/index.asp>, accessed on December 15, 2007. 現時点では、30万人の青少年がアクセスしているという。

⁶¹ <http://www.passagestocanada.com/index.asp>, accessed on December 15, 2007.

⁶² <http://www.greatquestions.com/e/>, accessed on December 15, 2007.

⁶³ <http://www.histori.ca/>, accessed on December 15, 2007.

⁶⁴ この歴史ドキュメンタリー番組については、拙稿「CBC ドキュメンタリー番組：『カナダ人の歴史』について」*Canada-Japan Business Review*, Vol.17, No.11, 2000年11月。

と解釈によって知識を形成、普及、かつ提示すること」を掲げ、そのためには「忠実かつバランスのとれた」アプローチが必要だとした。そして、こうした方針を進める上で「選択と拒絶」が必然的に伴うのは承知だが、「選択と拒絶」を行なう際に、「他者に対する敬意」と「カナダ的視点」を重視すると言明した⁶⁵。すなわち、多文化モザイクを形成する多様なグループに対する理解を育むために「カナダ的視点」を重視した選択を行なうが、何を選択するか——何を収集し、何を提示し、何を捨てるか——は難しく、その際、「他者に対する敬意」を払うことを念頭におくのだとした。もとより、「他者に対する敬意」を払えば対立が避けられるわけではなく、様々な見解の対立は避けられず、むしろそれを期待すべきでないとしていた⁶⁶。そして、収集から解釈による知識の形成と、展示、出版、デジタル化による知識の普及・発信を行なうのだと述べていた⁶⁷。このようなラビノヴィッチの「他者に対する敬意」を重視する姿勢や、選択や解釈には対立がともなうことへの認識は、戦争パネル展示論争で彼が示した立場に体现されていたといえる。

こうした一般論に加えて注目すべきは、ラビノヴィッチが、より具体的な方針の見直しとして、歴史重視、とりわけ政治史重視の姿勢を示していたことである。彼は言う。「カナダ文明博物館は、これまでいわゆる『政治史』からしばしば距離をおいてきた。……カナダは高度に政治的な構築物なのだ。交渉や妥協によって意識的に形成された国家体なのだ。この国を理解するには、政治を担った人びと、彼らの闘争、決意、失敗と功績を学ぶことが必須なのだ。……しかし、政治史は闘争に満ちており、公共の博物館は往々にしてそれを避けてきた。にもかかわらず、政治的過程をよりよく理解する必要があるのだ」と⁶⁸。これは、公的記憶の表象において公共博物館が担うべき役割を強く認識した表れであると同時に、ミュージアム法によって、カナダ文明博物館とカナダ戦争博物館とが同一の法人下に置かれたことで、いかに両館の一貫性を図るかという現実的課題に向き合ったがゆえと察せられる。実際、彼は、一般的には様々な集団の民族誌を扱い、それゆえ、最前で述べたように政治史から距離をおいてきたカナダ文明博物館と、「軍事活動という特定のレンズを通して見たカナダの歴史を扱う」カナダ戦争博物館が、同じクロノロジーで描かれた政治・経済・社会の展示を共有し、両館が相互補完的な役割を果たすべきと論じていたのだった⁶⁹。

如上の点を補足的に述べているのが、政治・文明評論で知られるカールトン大学 (Carlton University) のアンドリュー・コーエン (Andrew Cohen) の近著『未完のカナダ人——我らがその人—— (The Unfinished Canadian: The People We Are)』である。同書の第3章「無自覚なカナダ人 (Unconscious Canadian)⁷⁰」は、カナダ人の歴史認識欠如を辛辣に描いているが、その

⁶⁵ Victor Rabinovitch, "Imagining our future", in Christy Vodden & Ian Dyck, *A World Inside: A 150-Year History of the Canadian Museum of Civilization*, Ottawa, 2006, p. 88.

⁶⁶ *Ibid.*, pp.91-92.

⁶⁷ *Ibid.*, p.90.

⁶⁸ *Ibid.*, pp.88-89.

⁶⁹ *Ibid.*, p.90.

⁷⁰ Andrew Cohen, *The Unfinished Canadian: The People We Are*, Toronto, 2007, chap.3. ちなみに他章のタイトルは、「雑種のカナダ人 (The Hybrid Canadian)」, 「注意深いカナダ人 (The Observed Canadian)」, 「アメリカのカナダ人 (The American Canadian)」, 「気まぐれなカナダ人 (The Casual Canadian)」, 「首都のカナダ人 (The Capital Canadian)」, 「移り気なカナダ人 (The Chameleon Canadian)」, 「将来のカナダ人 (The Future Canadian)」である。

なかに、博物館に関する記述があり、カナダ文明博物館についても、ラビノヴィッチへのインタビューを踏まえながら言及がなされている。同書によれば、同博物館は、民族学、考古学、文化人類学の専門家の調査・研究・展示の場であった。同館の使命のなかに歴史が含まれたのは、1964年のことであったが、その歴史とは社会史を意味していた。30数年後の1999年に同館は歴史家による外部評価を実施した。その評価で、様々なグループの民族誌が個別に展示されているため統一性が欠如しているとの指摘を受けた。この評価結果に基づき、同館は、政治史を扱う学芸員を初めて採用したり、展示に歴史的な文脈を多く取り入れたりするなど、工夫をこらしてきたという⁷¹。なお、このコーエンの論説は、カナダ人の歴史認識の欠如を批判したもののだが、それは、博物館にとどまらず、その他公共機関、歴史教育、歴史書、歴史クイズやコンテスト、記念碑など、広範に話題がおよんでいる。

以上みてきたように、公的記憶の共有、とりわけカナダの「国家（国民）」全体の歴史の共有がカナダの社会統合には必要との認識が強まっていることが明らかであろう。しかも、これは、通俗歴史家、歴史普及・啓蒙団体、博物館に限るものではなかった。歴史研究者のなかにも、「国家（国民）の語り」の重要性を認識し、ナショナル・ヒストリーへの回帰を求める動きが存在した。次章では、この点につき、歴史研究者の動静に注目してみよう。

4. 歴史研究者、公的記憶、そして戦争の記憶

1998年、グラナツティンが著した『誰がカナダ史を殺したのか Who Killed Canadian History?』は、著名な歴史家による極めて論争的な書として反響を呼び、ノン・フィクション部門のベストセラーとなった⁷²。同書はまず、学校教育においてカナダ史が軽視されている状況を憂慮する。そして、カナダの歴史の断片化を回避するためには、「ナショナル・スタンダード」の歴史教育が必要だとする。彼の言う「ナショナル・スタンダード」とは、事実の単なる受動的理解ではなく質問を促すような知的刺激に満ちていることや、因果関係を理解すべくクロノロジーに基づいていること、グローバルなコンテキストで理解することなど、一般に歴史理解に必要な内容に加えて、「多様性 (diversity) かつ国民全体の共通性 (commonalities)」を反映し、「我々の共通の市民アイデンティティと価値の共有に対する理解を深め、主要な政治問題の分析をすることで、市民教育 (citizenship education) に資すべきこと」「我々の民主主義の歴史的淵源、カナダの理想と制度の発展、理想と実践をうめる努力を示すこと」など、カナダ社会全体の理解を促進するような内容を意味している。そして具体的には、地域史に加え、国家（国民）の

⁷¹ *Ibid.*, p.90.

⁷² J. L. Granatstein, *Who Killed Canadian History?*, Toronto, 1998. 同書は、2007年に改訂版が出された (J. L. Granatstein, *Who Killed Canadian History?*, Toronto, rev. ed., 2007.)。1998年の初版との主たる違いは、新たに2つの章が加えられ (chaps. 6 & 5.)、8章構成となったことである。本稿では、「2007年改訂版」と記載する。また同書に対する批判は、A. B. McKillop, “Who Killed Canadian History?: A View from the Trenches”, *Canadian Historical Review*, Vol.80, No.2, June 1999; Bryan D. Palmer, “Of Silence and Trenches: A Dissident View of Granatstein’s Meaning”, *Canadian Historical Review*, Vol.80, No.4, December 1999; Bernard Dionne, “Note Critique: Granatstein, J. L., *Who Killed Canadian History?* (Toronto, Harper Collins Publications, 1998), 156p.”, *Revue d’Histoire de l’Amérique Française*, vol.52, n° 2, automne, 1998.

歴史を教える重要性を力説した⁷³。

同書の批判の矛先は、学校教育にのみ向けられたわけではない。すなわち、大学で政治史を教授するコースが隅に追いやられている。社会史ブームのなかで研究者は内向化し、研究分野・視点も矮小化、断片化の一途を辿っている。その結果、カナダ社会全体を包括的に描く歴史書は書かれなくなっており、そうした分野は通俗歴史家の手に委ねられてしまっているのが現状だ、と憂慮する⁷⁴。同書はまた、カナダ社会がかつて保持していたイギリスとの絆が弱まり、多文化主義政策が行き過ぎた結果、個々のエスニック・グループの歴史に過度に焦点があてられたため、共通の歴史認識の土台が失われたとも論ずる⁷⁵。

このようにグラナツティンは、「国家（国民）の語り」、つまり、ナショナル・ヒストリーを重視した歴史教育・研究の必要性を唱えるのだが、その根幹に位置づけていたのは、戦争、とりわけ両次の世界大戦の歴史であった。

「世界大戦とそこでのカナダの役割は重要である。それは、極めて重要であり、忘れ去られたり、学校で教えずにすませられたりはできないのだ。第1次大戦ではカナダは植民地であり、戦闘行為を始める決定において、役割も発言力も持ってはいなかった。……イギリス系カナダ人は、イギリスを最大限支援しようとした……。フランス語系カナダ人、農民、到来して間もない移民は、カナダの、かつまた彼らの利害が、敵対する諸帝国間の争いに直接関わるとは理解していなかった。その後生じた徴兵危機（conscription crisis）は、フランス系カナダ人に対して、本来はよそに向けられた彼らの忠誠をイギリス系カナダ人が頼りにしているのだと説得させた……。投票操作、ゲリマンダー、腐敗——これらすべては、戦争への勝利の必要性から正当化しえたのであり、実際に正当化されたのだ。ケバックは忘れてはいなかった。」「同様に重要なのは、第1次大戦によってカナダ人が自らを国民（nation）と意識させたことである。第1次大戦期、カナダ遠征隊に従事した者の半数は、イギリス生まれであった。だが、カナダ部隊が勇敢な攻撃で名をあげることで、移民の植民地人たち（immigrant colonials）は、カナダ人になったのだと自覚したのだ⁷⁶」。このように、第1次大戦における貢献こそが、カナダの自立にとっては重要だったこと、つまり、第1次大戦がカナダ・ナショナリズムの進展において重要な画期であったことを強調する。

第2次大戦についても、グラナツティンは、カナダ兵の活躍を力説する。そして、両次大戦の経験すべてが、カナダの誇れるものであり、忘れ去られてはならないとする。「ヴィミー・リッジ（Vimy Ridge）、パシェンデール（Passchendaele）、100日間〔実際は96日間〕のドイツとの攻防（Hundred Days）、ディエップ（Dieppe）、香港（Hong Kong）、オルトナ（Ortona）、ファレーズ（Falaise Gap）、スケルデ川掃底（clearing of the Scheldt）、オランダ解放、大西洋護衛活動、イギリスおよびドイツでの空中戦は、老いも若きも、カナダ生まれも新参の移民も、すべてのカナダ人の集合的意識（collective consciousness）の一部なのだ。戦争〔両次大戦〕は、カナダ

⁷³ Granatstein, *op. cit.*, pp.43-44. (2007年改訂版では、pp.45-46.)

⁷⁴ *Ibid.*, chap. 3. (2007年改訂版も同様)

⁷⁵ *Ibid.*, chap. 4. (2007年改訂版も同様) カナダ社会におけるイギリス（帝国）のファクターの重要性とその変化については、拙著『カナダ・ナショナリズムとイギリス帝国』刀水書房、2007年、第4章。

⁷⁶ *Ibid.*, pp.131-132. (2007年改訂版では、pp.136-137.)

の遺産の一部、誇るべき部分なのだ⁷⁷」と。

しかしながら、実際には、多文化社会カナダにあっては、兩次大戦の歴史を教えることは、対立を引き起こす要因になるとして、初等・中等教育では危険すぎてほとんど教えられていない。あるいは、教えられても、日系カナダ人の強制収容やユダヤ人難民排斥といった負の側面の方が扱われるのが現状だ、とグラナツティンは憂慮する。また、大学でも戦争の歴史を学ぶ学生は限られているとする⁷⁸。つまり、彼は、多文化主義が行き過ぎたあまりに、カナダ社会の統合に資すると彼が考えるカナダの戦争貢献の歴史が軽視されていることに失望したのである。

このように、ナショナル・ヒストリー、とりわけ戦争の歴史を語ることが重要だとみるグラナツティンが、それを公的記憶として展示するカナダ戦争博物館の充実を求めたのは、当然であった。かつての国立カナダ文書館 (National Archives of Canada) (現在は国立カナダ図書・文書館 (Library and Archives Canada)) の建物を利用した、展示スペースも狭く老朽化したカナダ戦争博物館は、カナダの「誇り」であるはずの戦争貢献を国内外に示すにはあまりにもお粗末なカナダの「恥」だと解されたのである。それゆえ、戦争という1つのテーマでナショナル・ヒストリーを内外に対して存分に語れる場、あるいは、公的記憶として国民が共有する場として機能すべく、新しいカナダ戦争博物館が必要とされたのである⁷⁹。

2005年5月8日の新カナダ戦争博物館の開館式典 (午後3時開始: カナダ東部時間、以下同様) の模様を伝えるカナダ放送協会の中継放送の解説をしたのはグラナツティンであったが、その日彼は、午前8時から中継されていたオランダのアペルドーン (Apeldoorn) でのV・E・デーの式典パレードも現地から解説していたし、午前10時半から始まったポール・マーティン (Paul Martin, Jr.) 首相、閣僚、野党党首、各国代表、軍関係者、復員軍人らを迎えてのオタワの国立戦争記念碑 (National War Memorial) でのV・E・デー記念式典でもコメントをしていた⁸⁰。第2次大戦終結60周年でカナダが「退役軍人の年 (Year of the Veterans)」とした2005年、復員軍人が誇りとするV・E・デー、「カナダ人よりもカナダ兵の貢献を知り、評価している⁸¹」オランダ、そして、首都オタワでのV・E・デー式典と新カナダ戦争博物館開館式典——これ

⁷⁷ *Ibid.*, pp.133-134. (2007年改訂版では、p.139.)

⁷⁸ *Ibid.*, p.115. (2007年改訂版では、p.123.)

⁷⁹ 新旧のカナダ戦争博物館創立の経緯や軍事史の国民化については、Roger Sarty, "The Nationalization of Military History: Scholarship, Politics, and the Canadian War Museum", in Norman Hillmer & Adam Chapnick (eds.), *Canadas of the Mind: The Making and Unmaking of Canadian Nationalisms in the Twentieth Century*, Montreal & Kingston, 2007. 新カナダ戦争博物館開館までの経緯や開館後の反響などに関するグラナツティンによる説明は、2007年改訂版で述べられている。pp.xvi-xix (preface to the revised and expanded edition), chaps. 6-8. このなかで、彼の初版本の刊行が、本稿第3章で述べた歴史普及・啓蒙活動に少なからぬ影響をおよぼしたことも言及している。しかし、本稿の考察対象であるパネル展示をめぐる論争への言及はない。2007年改訂版は、パネル展示論争中に刊行されている (序文は2007年7月に執筆)。

⁸⁰ オランダでのV・E・デー式典パレードには、当初マーティン首相が参列する予定だったが、不安定な政局のために出席できず、カナダ総督 (Governor General of Canada) アドリエンヌ・クラークソン (Adrienne Clarkson) が出席し、オタワでの式典にはマーティン首相が出席する形となった。なお、数日後、マーティン首相は、野党党首らとともにオランダを訪問し、カナダ兵戦没者墓地を訪れた。また、これらの中継放送を担当したのは、カナダを代表するアンカーマンであるピーター・マンズブリッジ (Peter Mansbridge) であった。これは、カナダ放送協会が、オランダ、カナダ両国でのV・E・デー式典パレードと新カナダ戦争博物館開館を重視していたことの証左である。

⁸¹ *Ibid.*, pp.111.

らはすべて、グラナツティンの年来の主張を象徴するものであったといえよう。

グラナツティンが示した兩次大戦におけるカナダの戦争貢献の評価は、多くの軍事史研究者の間では共有されていた。もとより、カナダ戦争博物館の軍事史研究者ティム・クック (Tim Cook) によれば、昨今の軍事史研究者は、戦争とカナダ政治、カナダ兵の作戦などの分析をこえて、カナダの社会に対して戦争がいかなる影響を与えたかなど、様々な社会史的テーマの考察を行なっている⁸²。しかし、第1次大戦をカナダ・ナショナリズムの進展における重要な画期とみる「植民地から国家 (国民) へ (colony-to-nation)」的な解釈は根強く、同戦争の記憶は、イギリスとくらべて悲劇的には捉えられてはいない。また、第2次大戦は、第1次大戦以上に「良き戦争」と捉えられる傾向が強いという⁸³。

戦争の歴史に限定するわけではないが、ナショナル・ヒストリーの重要性は、他の歴史研究者の間でも共有されていた。たとえば、政治、医学、ビジネスなど多方面の領域に踏み込んだ歴史研究を行なってきたマイケル・ブリス (Michael Bliss) トロント大学名誉教授・特別栄誉教授 (university professor emeritus) は、1991年10月、同大学歴史学部創設100周年を記念したクレイトン・センテニアル講演 (Creighton Centennial Lecture) で『知性の私物化 — カナダ史の分裂、カナダの分裂 (Privatizing the Mind: The Sundering of Canadian History; the Sundering of Canada)』と題する講演を行ない、極度に専門化した昨今のカナダ史研究を批判し、ナショナル・ヒストリーの全体像をも描きうる歴史研究の必要性を訴えた⁸⁴。また、1995年には、カナダ・ナショナル・ヒストリー研究会 (Organization for the Studies of the National History of Canada) (現在は、カナダ史研究会 (Organization for the History of Canada)) が発足し、同研究会は、1997年、『ナショナル・ヒストリー (National History)』を創刊した。

これらの動きは、いわゆる社会史研究の隆盛、それにともない専門分化が著しいカナダ史研究の現況に対する反省のみならず、ケベック分離独立運動をめぐる現実政治のなかで露呈されたカナダ人の愛国心喪失の状況を直視し、それをナショナル・ヒストリーを教授してこなかっ

⁸² Tim Cook, *Clio's Warriors: Canadian Historians and the Writing of the World Wars*, Vancouver, 2006, p.258.

⁸³ *Ibid.*, p.250.

⁸⁴ のちに論文として発表。Michael Bliss, "Privatizing the Mind: The Sundering of Canadian History; the Sundering of Canada", *Journal of Canadian Studies*, Vol.26, No.4, 1991/92. この講演 (論文) は、大きな反響 — しかも否定的な — を呼んだ。e.g. Gregory S. Kealey, "Class in English-Canadian Historical Writing: Neither Privatizing, Nor Sundering", *Journal of Canadian Studies*, Vol.27, No.2, 1992; Linda Kealey, Ruth Pierson, Joan Sangster & Veronica Strong-Boag, "Teaching Canadian History in the 1990s: Whose 'National' History Are We Lamenting?", *Journal of Canadian Studies*, Vol.27, No.2, 1992; Strong-Boag, "Contested Space: The Politics of Canadian Memory (CHA Presidential Address, 1994)", *Journal of the Canadian Historical Association*, New Series, Vol.5, 1995. ブリスの主張は、後出のリチャード・ホワイト (Richard White) の言葉を借りれば、「保守主義的歴史学 (historiographical conservative)」と言われるが、「ナショナル・ヒストリー」といっても、ドナルド・G・クレイトン (Donald Grant Creighton), アーサー・R・M・ロワー (Arthur Reginald Marsden Lower), F・H・アンダーヒル (Frank Hawkins Underhill) らの旧来の「ナショナル・ヒストリー」への回帰を求めたわけではなかった。なお、同大学は、カナダを代表する歴史家クレイトンを顕彰するクレイトン記念講演シリーズを毎年開催し、国内外の著名な歴史家を招聘している。ブリスの歴史家ないしは教育・研究者としての評価は次の文献に詳しい。E. A. Heamen, Alison Li & Shelley McKellar (eds.), *Essays in Honour of Michael Bliss: Figuring the Social*, Toronto, 2008, Introduction & Part I. とくに先のブリスの主張については、Richard White, "Inspiration as Institution: Michael Bliss as a Graduate Adviser, 1989-1994", *ibid.*, pp.60-61.

た歴史研究者の責任とする歴史研究者自身の反省に立つ刷新運動といえることができる⁸⁵。これらは、先に述べたグラナツティンの主張と同様である。もとより、ケベック分離独立運動に対して連邦主義の立場をとる歴史研究者がすべて上記の見解に与したわけではなく、どちらかといえば保守的な姿勢をとる歴史研究者、あるいは、政治史の復権を主張する歴史研究者が、この動きに同調したといえる。また、こうした動きに加わる、加わらないにせよ、歴史研究者が現実の政治に歴史研究者としての発言をすべきとの主張はなされている⁸⁶。

以上みてきたグラナツティンに代表される「国家（国民）の語り」を重視し公的記憶の共有の必要性を説く歴史研究者らの姿勢は、史料による厳密な実証、因果関係の探求といった学問的客観性については異なるとしても、先にみた通俗歴史家や歴史の普及・啓蒙団体の志向と大きく重なるのである。

5. おわりに

最後に、如上の点を、前に考察した戦争パネル展示をめぐる論争と合わせて考えてみよう。同論争は、復員軍人と歴史家との対立と思われたが、実は必ずしもそうではなかったのである。すなわち、歴史家側、より厳密に言えば、歴史研究者側は、学問的客観性をめぐって復員軍人側と対立したが、歴史研究者は学問的客観性については一致して反対したものの、公的記憶における歴史のあり方については、一枚岩ではなかった。上述のように、カナダの戦争の歴史や、復員軍人らが要求する彼らの行動の意義を評価し、それを公的記憶の重要な要素として位置づけようとした歴史研究者も存在したのである。

グラナツティンは、パネル展示の文言の変更には反対したが、それは、歴史研究者としてアカデミズムに固執する姿勢を示したためであり、かつまた、行き過ぎた多文化主義に対する憂慮、すなわち、復員軍人の要求を受け入れることが他の個人・集団の要求に対処しなければならぬ状況を生み出すことを危惧したためでもあった。誤解を怖れずに言えば、カナダの戦争の歴史を公的記憶として共有すべきとする歴史研究者と復員軍人との間には、ズレをもちつつも、「共犯」関係が成立していたのである。こうした歴史研究者や歴史の普及・啓蒙をはかる諸団体の主張と、復員軍人たちによる戦争博物館のパネル展示の変更を求める要求とは通底していたのである。とりわけ軍事史研究にみる従来の歴史解釈が、復員軍人の記憶を実証的に裏付けていたことになる。つまり、戦争がカナダの発展を促し今日のカナダの礎を築いたとみな

⁸⁵ Doug Owsram, "Narrow Circles", *National History*, Vol.1, No.1, 1997. 加えて、カナダ人のカナダ史への関心の低下やカナダ史教育の危機が叫ばれた。多文化主義の下、州ごと、地域ごと、エスニック・グループごとに異なる歴史が教えられ、1867年のカナダ連邦結成（Confederation）期には中央集権的であったカナダ（当時はカナダ自治領（Dominion of Canada））が、今や最も分散化した（decentralized）連邦体として国家の分裂が指摘された。Desmond Morton, "Teaching and Learning in Canada", in Peter N. Stears, Peter Seixas & Sam Wineburg (eds.), *Knowing, Teaching, and Learning History: National and International Perspectives*, New York, 2000.

⁸⁶ たとえば、セントジョーンズ（St. John's）でのカナダ歴史協会年次大会会長講演で、先住民史の権威 J・R・ミラー（J. R. Miller）は、今日の重要な政治論議のなかで歴史研究者が蚊帳の外におかれている現実を憂え、歴史研究者は歴史の研究、解釈において、そして言論界と学界における歴史の活用において、自らの役割を主張すべきと説いた。J. R. Miller, "Presidential Address: The Invisible Historian", *Journal of the Canadian Historical Association*, New Series, Vol.8, 1999. 次の論稿も参照。Margaret Conrad, "Public History and its Discontents or History in the Age of Wikipedia (CHA Presidential Address, 2007)", *Journal of the Canadian Historical Association*, New Series, Vol.18, No.1, 2007.

す歴史解釈が、自らの体験や感情と混在する形で公的記憶として認知させようとする復員軍人の要求を促したといえよう。

さて、本稿が主として論じたのは、復員軍人とそれに親和性をもつ歴史家の描く戦争の記憶であった。無論、歴史家は一枚岩ではないし、戦争の記憶も一様ではない⁸⁷。実際、彼らが危惧したのは、戦時に抑圧された人びとの記憶が過度にクローズアップされることであった。対して、こうした抑圧された記憶を公的な記憶として認知すべきとする対立した意見も存在する。これは、戦争の記憶に限るものではない。多様な移民や先住民が居住するカナダ社会では、それぞれの多種多様な記憶が混在し、そうしたポリフォニックな記憶をいかに公的記憶として認知すべきか問題が山積している。たとえば、オタワ大学のティモシー・J・スタンレー (Timothy J. Stanley) は、中国系カナダ人の表象のあり方を例にしながら、公共博物館などが提示する公的記憶が、人種主義 (racism) を沈黙させていることを指摘する⁸⁸。公的記憶は、単一あるいは一定の方向におさまるものではなく、複数あるいは多元的に提示され、多变的に変容をとげていくものなのである。多文化主義を国是とする多文化社会カナダにおいて、公的記憶のあり方は実に複雑なのである。

近年、博物館や史跡などによる公的記憶の表象がもつ政治性について指摘されているが⁸⁹、本考察で取り上げた戦争パネル展示の論争は、その一端を表しているといえよう。カナダでは、20世紀中葉から「歴史体験博物館」とでもいうべき「リビング・ヒストリー・ミュージアム (living-history museum)」が多数つくられた。これは、史跡を教育に活用する目的で建設されたが、その背景には、失業者救済や観光客誘致という経済的理由があった。「リビング・ヒストリー・ミュージアム」は、「過去の『ディズニー化』 (“Disneyfication” of the past)」としばしば揶揄されてきたが、その設立背景は何であれ、それが歴史認識や公的記憶の形成に与えた影

⁸⁷ カナダ歴史協会は、2008年1月、戦争展示パネル問題における上院の対応を不服とし、本件をめぐる議論の場として、同年6月にブリティッシュ・コロンビア大学で開催される同協会年次大会で「歴史論争を真摯に誘導する Navigating Historical Controversies with Integrity」というタイトルのパネルを設けることを決定した。パネリストは、ラビノヴィッチとコンラッド前会長のほか、パークス・カナダ (Parks Canada) のライル・ディック、ブリティッシュ・コロンビア大学のピーター・セイサス (Peter Seixas)。CHA News, Bomber Command Panels at the Canadian War Museum, Jan. 14, 2008. (http://www.cha-shc.ca/english/news_nouvelles/story.cfm?id=38, accessed on April 29, 2008.); CHA Annual Meeting, Programme of the 87th meeting of the Canadian Historical Association. (http://www.cha-shc.ca/english/ativ/meeting_reunion/view.cfm?=2008, accessed on April 29, 2008.) なお、本稿註27も参照。

⁸⁸ Timothy J. Stanley, “Whose Public? Whose Memory? Racisms, Grand Narratives, and Canadian History”, in Ruth W. Sandwell (ed.), *To the Past: History Education, Public Memory, & Citizenship in Canada*, Toronto, 2006.

⁸⁹ 本稿註3で列挙したほかに、C. J. Taylor, *Negotiating the Past: The Making of Canada's National Historic Parks and Sites*, Montreal & Kingston, 1990; Royal Society of Canada, *The Place of History: Commemorating Canada's Past, Proceedings of the National Symposium held on the Occasion of the 75th Anniversary of the Historic Sites and Monuments Board of Canada*, n. p. 1997; Sarty, *op. cit.*; 溝上智恵子『ミュージアムの政治学——カナダの多文化主義と国民文化』東海大学出版会、2003年、吉田憲司『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店、1999年、川口幸也『「世界遺産」という語りのしかけ』『民博通信』108号、2005年3月、同「近代史のとらえなおし——共同研究：展示という語りの多様性と政治性——』『民博通信』112号、2006年3月、暮沢剛巳『美術館の政治学』青弓社、2007年、など。このうち、溝上氏のはカナダの博物館や史跡を扱ったモノグラフであり、第5章「戦争の記憶」で、旧カナダ戦争博物館における展示の政治性を分析している。また、津田博司「帝国を渡る沈黙——大戦間期カナダにおける戦没者追悼記念日』『待兼山論叢』第40号史学篇 (2006年12月) は、リメンブラン・デーの分析からカナダにおける戦争の記憶の特質をイギリス帝国の枠組において考察している。

響も考慮しなければならないのである⁹⁰。過去を記憶の闇に葬り去らず、記憶の忘却から歴史的事実を救い出し、公的記憶としていかに表象していくか、そして、それを次世代にいかに受け継いでいくべきか。公的記憶の表象は、次世代の記憶の形成・変容に影響をおよぼす、過去から未来へと繋がる重い課題である。

付記 本稿は、2007～08年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)による研究成果の1部である。

⁹⁰ cf. Alan Gordon, "World of Museums: The History of Living History", *Bulletin* (Canadian Historical Association), Vol. 33, No.1, pp. 4-5.